

第十三章 女三の宮の物語 柏木、女三の宮を垣間見る

[第一段 夕霧の女三の宮への思い]

大将の君は(源大将君は)、この姫宮の御ことを(父君の源氏殿に降嫁なされたこの姫宮のことを)、思ひ及ばぬにしもあらざりしかば(自分が娶る事も、考えなかったでもない)、目に近くおはしますを(間近にいらっしゃるのを)、いとただにもおぼえず(とても気にせずには居られず)、おほかたの御かしづきにつけて(日頃の御挨拶という事で)、こなたにはさりぬべき折々に参り馴れ(姫宮のお部屋には事あるごとに参り慣れて)、おのづから御けはひ(御簾越しながらも、次第に姫宮の佇まいや)、ありさまも見聞きたまふに(御生活ぶりも見知りなされると)、いと若くおほどきたまへる*一筋にて(とても幼くおっとりしていらっしゃる一面だけ見えて)、上の儀式はいかめしく(部屋の飾り付けや女房の行儀作法などの様式は格式高く)、世の例にしつばかりもてかしづきたてまつりたまへれど(世の前例になるほどに父殿は敬ってお相手申しいらっしゃるが)、をさをさげざやかにもの深くは見えず(あまりはっきりと深いところまでは分かりません)。*「ひとすじにて」と「もの深くは見えず」は呼応していて、この部分は構文として<~という一面しか見えないので良く分からない>という言い方なのだろう。「もの深し」を、宮の<思慮深さ>や、殿の<深い愛情>などと、貴人の形容に読むには敬語の無さが、それを許さない。この「ものふかし」は判断としての<深いもの>だ。また、この文の視点は大将君らしく、大将君自身の見解のような話しっぷりだが、話の内容はそのように姫宮に関心を寄せる大将君を観察した女房の推論のようで、いかにも女房が良くしそうな世間話の類、として見た方が良さそうだ。その所為か、何とも理詰めが甘い口調で、全体の文意がとても分かり難い。

女房なども(側仕えの女房なども)、おとなおとなしきは少なく(経験のある年輩者は少なく)、若やかなる(如何にも若い)容貌人の(かたちびとの、美人の)、ひたぶるにうちはなやぎ(ただただ華やいで)、さればめるはいと多く(気取っている者がとても多く)、数知らぬまで集ひさぶらひつつ(数え切れないほど多く集い控えては)、もの思ひなげなる御あたりとはいひながら(特に悩みの無さそうな姫宮の御様子とは言うものの)、何ごとものどやかに心しづめたるは(何ごとにも呑気で気が回らない若女房は)、心のうちのあらはにしも見えぬわざなれば(気持をどう表したら良いのか分からないものなので)、身に人知れぬ思ひ添ひたらむも(自身に人知れぬ悩みがあっても)、またまことに心地ゆきげに(その一方でとても愛想良く)、とどこほりなかるべきにしうち混じれば(何の問題も無いようにして他の女房たちと世間話でもしていれば)、かたへの人にひかれつつ(相手に話を合わせるうちに)、同じけはひもてなしになだらかなるを(同じように振舞って穏やかなので)、ただ明け暮れは(ただ一日中)、いはけたる遊び戯れに心入れたる童女のありさまなど(他愛無い遊び戯れに夢中になっている童女の姿など)、院は(源氏殿は)、いと*目につかず見たまふことどもあれど(とても見苦しくお思いになることもあったが)、一つさまに世の中を思しのたまはぬ御本性なれば(一つの事で物事を決め付けなさない御考えなので)、かかる方をもまかせて(そういう姫宮のけじめの無さも放任で)、さこそはあらまほしからめ(好きにすれば良い)、と御覧じゆるしつつ(と大目に見ていらして)、戒めととのへさせたまはず(叱り直させはなさいませんでした)。*「目に付く」の「付く」は<気にいる>という意味らしい。殿の御前を弁えない子供を許している、宮の御方体制のだらしなさ、が殿の気に入らない、という文意かと思うが、とにかく分かり難い文だ。女房語りの緩急の息継ぎや溜めで聞けば、すっと理解できるのだろうか。いや、でもそれも、当時の女房

たちの実情を知っている、正にその当時の女房仲間やその周辺の者なら分かったのかも知れないが、より広い読者層への説得力を心掛ける意識が感じられず、どうも客観的な視野に立つ社会認識が一段劣った見習い筆者が担当した文のような印象を受ける。ただ逆に、それだけに実際の女房言葉に近い言い回しではあるのかも知れない。

正身の御ありさまばかりをば(ただ、姫宮ご自身の御振る舞いだけは)、いとよく教へきこえたまふに(殿はそれは細かにご注意なされたので)、すこしもてつけたまへり(すこし艶ある作法も身に付けなさいました)。「正身(しゃうじみ)」という語には<生身の女>という語感がある、と何度もノートしているが、此处でも是は閨での床仕種のことのように思えるが、であれば大将君に窺い知れる事柄でもなく、此处の語りは大将君の視線で書かれているのだから、此处では其処まで補語するのは控えて置く。ただ、それこそ「男」や「女」と呼称した閨での記事が前後に全く無いので、「すこしもてつけたまへり」は傍目にも分かる姫宮の物腰の変化で、「正身の御ありさまばかりをば、いとよく教へきこえたまふに」を語り手女房のその理由説明と見ることも出来そうな気もするが、半疑問や推量の言い方になっていないので、やはり是は、女房の目で見えてはつきりと分かる範囲での、大将君も分かったであろう姫宮の状態を述べたもの、と取るのが素直な読み方に思える。即ち、源氏殿は姫宮の管理責任までは正さなかったが、直接相手をする宮本人の仕種だけは注意していた、と側女房は日常生活上の耳目に見聞きできた、ということなのだろう。しかし、その側女房が姫宮付きなら、管理体制を自ら反省して立て直したから、この側女房は基本的に源氏殿付きの、大将君も昔から知っている古女房という設定ということになりそうだ。

[第二段 夕霧、女三の宮を他の女性と比較]

かやうのことを(こうした事情を)、大将の君も(だいしゃうのきみも)、

「*げにこそ(全く)、ありがたき世なりけれ(夫婦とは難しいものだ)。*紫の御用意(紫の上の御心構えや)、けしきの(暮らしぶりが)、*ここの年経ぬれど(長年と父君に連れ添っていらしたが)、ともかくも漏り出で見え聞こえたところなく(特にどうだと問題となる噂を見聞きすることなく)、しづやかなるをもととして(穏やかな事を初めとして)、さすがに(それだけに)、心うつくしう(心優しく)、人をも消たず(他人を威圧せず)、身をもやむごとなく(ご自身は威厳があつて)、心にくくもてなし添へたまへること(行き届いた対応をなさっていらっしゃることだ)」*「げにこそ在り難き世なりけれ」の「こそ」は「げに」を自己同意して、その「実に」の中身の<在り難き世なりけり>という考察を強く主張しようとする助詞ではない。「こそ」は発見の助動詞「けり」の驚きを強調している。自信はないが、この文を別の古文で言えば、例えば<実に世の思ふ様に在り難きかな>みたいなこと、かと思う。*「紫の」と源君は<紫の上>を「紫」と呼称する。是は大将君の内心文だが、大将君の認識としては基本的に紫の上は義理の母はもとより、女主人としての「上」でもなく、父君と親しい好い女であり、源氏殿が厳しく両者を近づけなかっただけに、直接の関わりが全く無く、それだけに客観的な個体存在で、いつまでも新鮮な対象なのだろう。*「ここのとしへぬる」の「る」は尊敬の助動詞で、主語は紫上なのだろう。だから、「ここのとしふ」は<長年上が源氏殿と連れ添う>という事と読む。三の宮の話題に続いての文なので、降嫁以降のこの二年間ほどの事と読もうとしたが、「ここの」はやはり<長年>のようだし、下に「見し面影も忘れがたく」ともあるので、大将君が近くで見聞き知った長年の間でのこと、と見るほうが素直そうだ。

と、*見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける(五年前に見た紫の上の面影を忘れ難く思い出されなさいました)。わが御北の方も(御自分の御正室の藤原姫も)、あはれと思す方こそ

深けれ(可愛いと思いなさる面こそは深かったが)、*「見し面影」は野分巻一章二段に、八月の台風が近付いて強風に煽られる春の町の寝殿で「御屏風も、風のいたく吹きければ、押し畳み寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にみたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す」と、遠目ながら直接に源君が紫上を見止めたことを指す。注にも<「野分」巻に野分の吹いた朝、紫の上を垣間見たことが語られている。五年前のことである。>とある。

「いふかひあり(彼女は紫の上ほどに挙げるべき長所や)、すぐれたるらうらうじさなど(優れた所作仕種などは)、ものしたまはぬ人なり(備えていらっしやらない人だ)。おだしきものに(安心できる人と)、今はと目馴るるに(今は目馴れたので)、心ゆるびて(気が緩んで)、なほかくさまさまに(またこのようにさまざまな御方がたが)、集ひたまへるありさまどもの(集いなさっている六条院のようすが)、とりどりにをかしきを(それぞれが魅力的で)、心ひとつに思ひ離れがたきを(内心では浮気の興味が尽きないでいるのに)、ましてこの宮は(其処へ持ってきてこの宮は)、人の御ほどを思ふにも(御身分を考えても)、限りなく心ことなる御ほどに(この上なく格別な高貴さなのに)、取り分きたる御けしきしもあらず(父君は特に深い情愛をお持ちの御様子でもなく)、人目の飾りばかりにこそ(世間体を飾っているだけとは)」

と見たてまつり知る(とご推察申し上げます)。わざと*おほけなき心にしもあらねど(別に間違いを起こすような、畏れ多い気持ちだったわけではないが)、「見たてまつる折ありなむや(その内に、直接御顔を拝見できる折があるだろうか)」と、ゆかしく思ひきこえたまひけり(大将君は姫宮に興味をお持ち申しなさいました)。*「おほけなし」は<態度・言動が、身分・能力・年齢などに比べ、出すぎているさま。身のほどをわきまえない。大胆である。大それている。>または<おそれ多い。もったいない。>と大辞泉にある。現代語に繋がる語感は思い付かないが、近いのは<畏れ多い>だろうか。

[第三段 柏木、女三の宮に執心]

*衛門督の君も(衛門督の藤原君も源君と同じように)、院に常に参り(朱雀院に日常的に参上して)、親しくさぶらひ馴れたまひし人なれば(内情に通じて仕え馴れていらした人なので)、この宮を(この六条院に降嫁なされた姫宮を)父帝の(ちちみかどの、父上皇の)かしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなど(大事に育てて可愛がっていらっしやった御心向きなどを)、詳しく見たてまつりおきて(詳しく見知りさせて頂いて)、*さまざまの御定めありしころほひより聞こえ寄り(姫宮の婿候補を朱雀院がさまざまに御選定なさっていらした当事にも藤原君も申し込みに名乗りを挙げ)、院にも(朱雀院におかれても)、「めざましとは思し、のたまはせず(その申し込みを身の程知らずとは仰せにならなかった)」と聞きしを(と漏れ聞いたのを)、かくことさまになりたまへるは(このように六条院に降嫁なされたのを)、いと口惜しく(とても残念に)、胸いたき心地すれば(失恋の痛手も深く)、なほえ思ひ離れず(今なお諦め切れません)。*「ゑものかみのきみ」は藤原家長男だが、此処の「も」は一段冒頭に「大将の君は」と姫宮に興味を寄せる者として、源君を語った事を受けて、その同類の者として藤原君を挙げるという意味の列举の係助詞だ。などと口幅ったい事をいうのも、次の「院」が<六条院>なのか<朱雀院>なのかを見定める上で、源君が今は三条邸に暮らしているが、当然にも実家の六条院には「常に参り」「たまひし人なれば」、衛門督の藤原君「も」また同様に六条「院に常に参り親しくさぶらひ馴れたまひし人」だった、という文ではない、ということを確認する為だ。だからといって、この「院」が直ちに<朱雀院>を示している、という事にもならず、実に判然としないところではある。何で、「この」や「かの」くらいの前

置詞が置けないのか、と苛立つほどだ。それでも私は、この文の主文を「衛門督の君も」(この宮を)「なほえ思ひ離れず。」と読んで、この間に挟まれた文はその沿革説明という構成に見て、全体の文意と前後の語り口から、この「院」を<朱雀院>と見て置く。*「さまさまの御定め」の「御」は<朱雀院の>で、「定め」は<出家の決心>のようにも見えるが、「さまさま」とあるから、是は出家するに当たって朱雀院が定めた<姫宮の結婚についての様々な御方針>なのだろう。で、それらが「ありしころほひ」を二章あたりに見直すと、姫宮の婿候補は、今上帝、六条院、兵部卿宮、藤大納言、源君(当事は権中納言)、そして藤原君(右衛門督)、といったところが名を挙げて語られていた。そして、これは本文にはこういう書き方はされていないが、記された事柄を私なりに纏めれば、朱雀院は太后腹なので基本的に軸足は旧右大臣家勢であり、四人の姫の中で三の宮を除く他の三人の姫はどうやら全て旧右大臣家筋らしい。で、朱雀院が案じたのは、三の宮を旧右大臣家勢に預けても冷遇されるか後回しにされかねない、ということだったようだ。三の宮は左大臣家筋だったのではなくて王家筋だったが、他が全員右大臣家筋に取り囲まれては、やはり異質感は否めない。この「異質感」を朱雀院は後宮にも覚えたらしく、入内も避けた。既に中宮が立った上での入内では確かに妃の一人でしかない。また、降嫁するにしても大臣格以上の家柄でなければ上皇の体面が立たない。で、結局、嫁ぎ先は六条院に決まった、というのが朱雀院から見た大筋だ。

その折より*語らひつきにける女房のたよりに(その申し込みのとき以来、連絡係にしていた姫付きの女房からの知らせで)、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ(姫宮のご様子などを伝え聞くのを慰めに思うのは)、はかなかりける(虚しいものでした)。*「語らふ」は<語り合う、仲良くする>や<仲間にする、言い包める>などと古語辞典にあるが、此处では<(姫宮への申し込みを)相談する=伝手に頼る>だろう。「付く」は<役目が決まる>で、「語らひつく」は<連絡係にする>。藤原君は、父親が左家の惣領だが、母親は右家の四姫だった。で、六姫が朱雀院の尚侍なので、尚侍の後押しも受けたと二章五段にもあった。この女房も尚侍の御声掛かりだったのだろう。

「対の上の御けはひには(対の上の御正妻振りには)、なほ圧されたまひてなむ(姫宮は未だ劣勢でいらっしゃるようで)」と、世人もまねび伝ふるを聞きては(世間も又聞きを噂立てるのを耳にしては)、

「かたじけなくとも(畏れながら自分なら)、さるものは思はせたてまつらざらまし(そのようには決して思わせ申し上げない)。げに(全く)、たぐひなき御身にこそ(姫宮の類なき高貴なご身分には)、*あたらざらめ(不当この上ない)」*「あたらざらめ」は<あたらざりたまはめ>みたいな敬語遣いではないからだろうか、訳文では藤原君自身が<相応しくない>という意味に取っているようで、対比される「御身」を<源氏殿>としてあるようだ。が、この「当たる」は「御身」が一定の価値基準に<相当する>という価値判断なのであり、「御身」に対する形容ではない。とのように、小学館古語辞典には正に此处の文を例示して「当たる」の一用例説明としてある。私は古語辞典に従う。この内心句の語り語調としても、「げに」は「かたじけなし」を受けるのではなく、「さるもの」とは即ち「なほ圧されたまひてなむ」と噂される<姫宮の境遇>を対象体としての藤原君の思いに聞こえる。つまり、「御身」は<姫宮>だ。

と(という気持で藤原君は)、常にこの*小侍従といふ御乳主をも*言ひはげまして(いつもその連絡係の小侍従という宮の乳母にも不満を焚き付けて)、*「小侍従といふ御乳主」は「その折より語らひつきにける女房」のことで、此处でこういう説明の仕方をして悪い訳ではないだろうが、引っ張るならもっと作為的に気懸かりにさせておくか、明かすなら当初から説明して立体描写にするとか、妙に中途半端というか気が抜けた印象を受ける書き方だ。「小侍従(こじじゅう)」は筆頭ではないが、次席側近を思わせる通り名。「御乳主(おんち

ぬし)」の「乳主」は<乳母>と古語辞典にある。が、訳文では<乳母子>としてある。「めのとご」は「めのと」の実子で、乳飲み子を抱えているからこそ母は乳が出るのだから、その実子こそが「乳主＝乳の本来の授かり主」ではあるだろうし、当然に姫宮とはほぼ同時期の生まれに違いない。そして、自然に子供同士は近くで仲良く育つし、もともと乳母に選ばれる時点で、その母も主人家に相当近い家柄の産婦だった訳で、皆は互いに強い身内意識で結ばれている間柄なのだろう。とすると、この女房は15歳の若女房だったのだろうか。結婚当時なら13歳で、とても連絡係は務まらない。尤も、その姉で当事で18歳、今なら20歳くらいの女房が居たとすれば妥当かも知れない。でも、それなら<姫宮の乳の本来の授かり主>とは少しずれるので、いっそ私は「御乳主」は文字通り<乳母>だったと考えてみたい。それも、元は尚侍の上臈か、その縁者あたり、だったのではないか。因みに、藤原君は明示はないが今年でおよそ26歳、尚侍は更に明示がないが源氏殿や紫上との対比でざっと36,7歳辺りを想定すれば、15歳の姫宮と同じ年の子を持つ母親の年齢に近い。だから、この女房は尚侍と仲が良く、もしくはそれこそ乳母子だったかも知れない。使い走りなら15歳くらいの、童女から女房に成り立ての新米でも事足りるだろうが、藤原君の相談相手になるのはそれくらいの古女房だったのではないか。いくら宮付きの女房が若い者ばかりだったとは言え、古女房が居ない筈はなく、姫宮の程度に合わせて御方が子供じみた体制になっていた、というのは有り得る事態だろう。マ、後で違う記述が出れば其処で改めるが、今はそうしておく。*「言ひ励ます」は大辞泉に<強い口調で責め立てる。言い立てる。>とあるが<言葉をかけて元気づける。>ともある。「責める」といっても、源氏殿の持て成しを宮の女房が非難できる筈もなく、事態を善処する手立ても無い。在り得るのは、この姫宮の状態を<是で良いのか>と責め立てることで、宮が冷遇されていることへの女房の不満を募らせて、女房に源氏殿への裏切りを唆す、またはそういう隙を作る、という藤原君の作為だ。

「世の中定めなきを(世の中は無常なので)、大殿の君(源氏殿が)、もとより本意ありて思しおきてたる方に赴きたまはば(前から出家なさるご意向があるので、そのようになさったなら)」

と(と、その後の再婚相手には是非自分を勧め申上げ下さるよにと)、*たゆみなく思ひありきけり(少しも熱が冷めずに思い続けていました)。*「たゆみなし」は<たるまない＝緊張が続く＝熱意が衰えない>。「ありく」は「歩く(動く歩く、立ち回る)」の他に「在り来(状態が続いている)」という語があり、此処では後者だろう。現代語の「ありき」はその連用名詞らしい。

[第四段 柏木ら東町に集い遊ぶ]

弥生*ばかりの空うららかなる日、*六条の院に、兵部卿宮、衛門督など参りたまへり、*大殿出でたまひて、御物語などしたまふ。*「ばかり」は<程度・範囲を表す助詞>で<限定や短時間を表す>のは平安時代以降だと古語辞典に説明がある。ただ、この物語も平安期に書かれたとされるものなので、どちらの意味も取り得るが、文意からして此処では<～くらい、～ごろ>という季節感の説明で、限定的なく(三月に)なって直ぐ>という意味ではなさそうだ。が、「やよひばかり」を漠然と<三月ごろ>と言っているのでもないだろう。若宮の誕生が「弥生の十余日のほど」(十章五段)とされ、明石入道の入山が「この月の十四日になむ」(十一章三段)と記された手紙を、その入山を見届けた弟子の大徳が冬の町の尼君に持ち運んで(十一章四段)、それらの話題(十二章)が済んだ後の今の話題だろうから、今は恐らく三月末、少なくとも下旬だ。だから、この「ばかり」は<時期>ではなく<季節柄>を示しているに違いない。即ち、「弥生ばかりの」は<如何にも三月らしい>だ。*「ろくでうのみん」は事改まった言い方、に聞こえる。といって、特に儀式だった日、ということではなさそうなので、物語上で何かしらの展開を予告するような、ちょっと勿体ぶった言い回し、ということか。*「大殿」は「おとど」と読みがある。「出でたまひて」は「空うららかなる日」なので、部屋の中に招かず庭先で話をした、という意味で、多分、作者

としては場面説明をしているのだろう。どのように私は此処の文意を取るのか、上文の「参りたまへり」を終止形の文末と見て句点を置くことをせずに、連用中止の接続法と見て読点でこの文に続くように読みたい。が、あまりにも言葉少なで、当時の邸の生活感を知らない私は相当に補語しないと情景が浮かばない。で、下に「寝殿の東面」とあるので、源氏殿は寝殿の東面の庭を臨む南廂に「出でたまひて(出ていらして)」、縁側の兵部卿宮と衛門督に会って「御物語などしたまふ(会話をなさった)」と読んで置く。

「静かなる住まひは(静かな生活は)、このごろこそいとおつれづれに紛ることなかりけれ(最近は何れにとっても退屈で気を紛らすことが出来ない)。公私にことなしや(公私にわたって変化が無い)。何わざしてかは暮らすべき(今日は、何をして暮らしたものか)」

などのたまひて(などと殿は仰って)、

「今朝、大将のものしつるは、いづ方にぞ(大将が今朝来ていたが今は何処に居る)。いとさうざうしきを(詰まらないので)、例の(春恒例の)、*小弓射させて見るべかりけり(小弓射的をさせて見物しようではないか)。好むめる若人どもも見えつるを(好んで参戦しそうな若者たちも居たようだが)、ねたう出でやしぬる(惜しくも帰ってしまったかな)」 *「小弓(こゆみ)」はく小さい弓。遊戯用のもので、座って左ひざを立て、その上に左ひじを乗せて射る。多く春にもてあそばれる。>と古語辞典に装束の挿絵付きで説明がある。

と(と大将を)、*問はせたまふ(捜させなさいます)。 *「とはせたまふ」は注にく「せ」使役の助動詞。「たまふ」尊敬の補助動詞。源氏が人をして尋ねさせなされる、の意。>とある。「とふ」は「問ふ(質問する)」ではなくて「訪ふ(捜す)」なのだろう。

「*大将の君は(大将さまは)、丑寅の町に(北東区画の夏の町で)、人びとあまたして(部下近衛蔵人の大勢に)、鞠もて遊ばして見たまふ(鞠で遊ばせて見物なさっていらっしゃいます)」と聞こしめして(と殿はお聞きなさって)、 *「だいしゃうのきみ」は当事では最も一般的に順当な源君の呼び方だとは思いますが、現代語では主人筋に家人が<君>とは言えず、やはり<様>しかないだろう。

「*乱りがはしきことの(蹴鞠は思わぬ所に鞠が飛んで、始末が悪いものだが)、さすがに*目覚めてかどかどしきぞかし(それだけに驚かされて目が離せないのが面白いところなのだろう)。*いづら(どれ)、こなたに(その一同を、こちらに呼んで見物しよう)」 *「乱りがはし」はく乱れている。乱雑である。秩序が無い。ぶしつけである。>と古語辞典にある。此処では、蹴鞠についての特性を言っているのだから、鞠が上手く制御できないと<何処に飛ぶか分からない=始末が悪い>という意味かと思う。で、その<始末の悪さ>が蹴鞠の面白さだということが下に語られている、のだから。 *「目覚む」はく目が覚める←驚かされる>。「かどかどし」は「角々し(角立つ、角張ってなだらかでない)」と「オ々し(才気立つ、気が利いている)」の複意で<目が離せず面白い>と読んで置く。 *「いづら」は「何ら」の表記で<何処だ>と不特定な場所を示す言い方の他に、呼び掛けの副詞のように<(何はともあれ)それでは、さあ>という単語での使い方もあるようで、此処は後者だ。「いづら」は語感では、「い」が、その対象体認識ははっきりしているが、その対象の中身が不明という意味での、不定なものを示す音で、「づ」は下語の属性説明の上語の格助詞「つ」の音便、「ら」は場所や程度や状況の共通認識を確認する音、というところ。いつ(何時)、いか(如何)、いま(今)、いづ(出づ)、いと(何程)、いざ、いや、などなどの重要な語と同類にも見える。

とて(ということで大将君に)、*御消息あれば(殿の御呼び出しがあったので)、参りたまへり(大将君御一同が夏の町から春の町へ馬場沿いを伝って遣って来ました)。若君達めく人びと多かりけり(その中には上層部の子弟らしい若者が多く居たのです)。*「せうそこ」は<手紙>でもあるが、訪問して来意を告げることなども含めて、広く<連絡>を意味する語なのだろう。此处では殿が「いづら此方に」と仰ったのを承った家人が大将君の所に出向いて、その殿の御意向をお知らせ申した、ということだろうから、その御意向は実質で<御呼び出し>だ。

「鞆持たせたまへりや(鞆は持って来させなさいましたか)。誰々かものしつる(誰が来ているのですか)」

とのたまふ(と殿が源君にお尋ねなさいます)。

「*これかれはべりつ(こういう人たちです)」(と殿に答え申して、) *「かれこれ」は注に<夕霧の返事。実際は実名を言ったのだが、省略された書き方。>とある。

「*こなたへまかでむや(その庭先へ出ようじゃないか)」 *「こなたへまかでむや」は注に<源氏の詞。ここ東南の町へ来ませんか、の意。>とある。解せない注だ。与謝野文が是を大将君の詞と取っているようで、私もそう取る。ただ、「これかれはべりつ」は殿への返答だが、この「こなたへまかでむや」は蔵人たちへの呼び掛け、だと思う。先ず「こなた」だが、是は下に「こなた隠ろへたりけり」とあるように<東面の庭先>なのだろう。「まかづ」は「罷り出づ」の口語約らしく、「罷る」は<[動ラ四]《「ま(任)く」に対し、支配者の命によって行動するのが原義》>と大辞泉に解説があり、特に<(平安時代以降、勅撰集などの詞書や改まった気持ちの会話・消息に用いる)主として話し手側の「行く」の意を、聞き手に対してかしこまり丁重に言う。まいます。>とある語用が此处の文に該当しそうだ。つまり、「罷づ」は源君が近衛大将の立場で蔵人の指揮者として家主の源氏殿を敬って自らの手勢を謙遜する謙讓語だが、「まかでむ」に敬語が無いことや「や」の呼び掛けは、如何にも源君が手下の蔵人たちに向けて発した言葉に聞こえる。この読み方が、最も下の文に上手く繋がる。

と*のたまひて(と大将君がその一同に仰ると)、寝殿の東面(寝殿の東側は)、桐壺は若宮具したてまつりて(桐壺妃が若宮をお連れ申し上げて)、参りたまひにしころなれば(参内なさった後のことだったので)、こなた*隠ろへたりけり(その前庭のこの南庭はひっそりしていたが)、遣水などの*ゆきあひはれて(配した川が合流する所が広場になっていて)、*よしあるかかりのほどを尋ねて立ち出づ(蹴鞠に適した場所を探して各参加者は位置取りします)。*「のたまふ」は古語辞典に<上位者から下位者に、事の旨を告げ知らせる意を基本とする>と解説があり、この語が上の「こなたへまかでむや」を殿の詞と取る根拠としている向きもあるのかも知れないが、下の文意を見れば、是が大将から部下に発せられたものであることが分かる。「て」は此处では、単なる時系での事物発生列举ではなく、因果説明の助詞だ。*「かくろふ」は<隠れている>だが<ひっそりしている←表立たないでいる←目立たない>とも大辞泉にある。*「行き合ひ」は<出会うこと。また、その場所>と古語辞典にある。此处では配した川の合流地点らしい。梅枝巻一章三段の薫物合せで、殿が調合した秘伝の香を「西の渡殿の下より出づる汀近う埋ませたまへる」と湿った土中で醸成させたかの記事があり、東の渡殿の下にも川を配していただろうから、それらの合流地点なのだろうか。それとも、池に流れ込む河口部近くなのだろうか。寝殿からあまり遠くても詰まらないだろうから、程々の近さだったのだろう。「はる」は<延び広がる>。「はれて」は<広場になっていて>。*「由あり」は多く<由緒がある、風情がある>の意味で使われるらしいが、此处では<事情に則した=蹴鞠用に>だ。「かかりのほど」は<適した場所>。

太政大臣殿(おほきおほいどの、藤原殿)の君達(の御子息たち)、頭弁(とうのべん、筆頭蔵人の政務官)、兵衛佐(ひょうゑのすけ、兵衛府次官)、大夫の君(だいぶのきみ、警察長官)など、過ぐしたるも(などの成人した者も)、まだ片なりなるも(まだ未成年者も)、さまざまに(それぞれが)、人よりまさりてのみものしたまふ(他の人より優れた方ばかりでいらっしやいます)。

[第五段 南町で蹴鞠を催す]

やうやう暮れかかるに(少し暮れ掛かる時分に)、「風吹かず、かしこき日なり(風の無い良い日だ)」と興じて(と面白がって)、弁君も(べんのきみも、次男の弁君も)えしづめず立ちまじれば(とてもじっとしてられずに蹴鞠に加わると)、大殿(おとど、源氏殿が)、

「弁官も(文官である弁君までも)えをさめあへざめるを(納まっていられないのだから)、上達部なりとも(貴公子とは言え)、若き衛府司たちは(わかきゑふづかさたちは、若い武官たちは)、などか乱れたまはざらむ(どうして騒ぎ遊ばずにいらっしやれようか)。かばかりの齢にては(あの若さでは)、あやしく見過ぐす(見苦しいと目を逸らす方が)、口惜しくおぼえしわざなり(生まれた甲斐が無いというものだ)。*さるは(それにしても、弁君までが参戦するとは)、いと*軽々なりや(何という軽薄ぶりの)、このことのさまよ(この蹴鞠の面白さであることか)」 *「さるは」がくしかし、それにしても>という副詞定句だとしても、「さる」は当初の話題の<弁君の参加>を示している。 *「軽々」は「きゃうきやう」と読みがある。意味は<軽々しいさま。軽率なさま。>と古語辞典にあって文字通りだ。が、此処での語用は文意からして否定や非難には見えない。軽口、冗句だろう。

などのたまふに(などと仰るので)、大将も*督君も(源君も藤原の長男君も)、皆下りたまひて(皆庭に下りなさって)、えならぬ花の蔭にさまよひたまふ夕ばえ(得も言われぬ風情の桜の花の蔭に群れ遊びなさる夕映えの光景は)、いとよげなり(とても美しいものです)。をさをささまよく静かならぬ(蹴鞠は決して畏まったさまの静かさではない)、乱れごとなめれど(騒がしい遊戯なのですが)、所から人からなりけり(六条院の風格と貴公子たちの上品さの所為でしょうか)。*「督君」は「かんのきみ」で、音だけなら<尚侍の君>と同じだ。平仮名写本を漢字表記した校訂なのか、写本に漢字表記があるのかは知らないが、原文の分かり難さの一端を垣間見る思いだ。尤も、宮廷文化人同士が共通認識に則って語り、聞く、限りは先に実態を知っているの、普通の語り口なのだろうが。

ゆゑある庭の木立のいたく霞みこめたるに(見事な庭の遠景の木立が春霞にとても朧に見える中に)、色々*紐ときわたる花の木ども(それぞれにつぼみを開いて蹴鞠場一面に広がる桜の木々や)、わづかなる*萌黄の蔭に(少し芽吹いている柳の木陰で)、かくはかなきことなれど(こんな一寸した遊びでも)、*善き悪しきけぢめあるを挑みつつ(勝ち負けを競って)、われも劣らじと思ひ顔なる中に(我こそはと参戦に名乗りを上げる者たちの中で)、衛門督のかりそめに立ち混じりたまへる足もとに(衛門督が飛び入りで参加した足捌きに)、並ぶ人なかりけり(適う人は居ませんでした)。 *「ひもとく」は注に<『集成』は「「紐とく」は花の開くことを、女性に見立てていう歌語」と忠す。>とある。 *「もえぎ」は注に<『完訳』は「わずかに若芽のふいている柳の木のもとで」と訳す。>とある。なぜ、「やなぎ」と断定できるのかは分からないが、多くの場合にそういう庭景色があったことに基づく注解なのだろうと安易に乗って、そのまま補語する。 *「善き悪しきけぢめ」は<良し悪しの判定>とい言い方に聞こえるが、蹴鞠の良し悪しなど分からないし、結局は優劣を競う<勝負>には違いない。

容貌いときよげに(姿が美しく)、なまめきたるさましたる人の(元気の良い藤原君の)、用意いたくして(しっかり礼装に身を包んで)、さすがに乱りがはしき(それでいながら軽い身のこなしぶりには)、をかしく見ゆ(感心します)。

御階の間にあたる桜の蔭に寄りて(寝殿中央の先にある桜の木の側で)、人びと(蹴鞠の連中が)、花の上も忘れて心に入れたるを(花見見物も忘れて競技に熱中していらっしゃるのを)、大殿も宮も(源氏殿も兵部卿宮も)、隅の高欄に出でて御覧ず(階段隅の縁側に出て高欄から身を乗り出して御覧になります)。「御階の間(みはしのみ)」は「階隠しの間(はしかくしのみ)」に同じで<階隠しのある柱と柱との間(あいだ)。階を上った上段、簀子(すのこ)に面する庇(ひさし)の間(ま)。日隠しの間。階(はし)の間。>と大辞泉にある。「階隠し」は<社殿や寝殿造りの殿舎で、正面の階段上に、柱を2本立てて突出させた庇(ひさし)。社殿の場合は向拝(ごはい・こうはい)ともいう。日隠し。>とある。つまり、寝殿を庭から見て真正面中央の階段部分、のこと。其処に「あたる」は、その真正面方向を庭へ延長した先に「当たる所の」という言い方。「蔭に寄りて」は<木陰で>ではなく<木陰の側で>。

[第六段 女三の宮たちも見物す]

いと*労ある心ばへども見えて(誰も失敗しない集中力の高まりで)、*数多くなりゆくに(長続きする蹴鞠の白熱振りに)、*上臈も乱れて(高官も上気して)、冠の額すこし*くつろぎたり(冠の額際が少しずれて来ます)。*「労」は<苦労>だったり<功績>だったりする。「労あり」は<苦心の跡がある、成果が上がる>あたりか。この競技の場面で「成果が上がる」とは<競技に勝つ>ことに思えるが、「労ある心ばへども」は<勝負の数々>ではなく、試合の内容を説明しているように聞こえるので、この「労ある」は<失敗の少ない好試合>と取って置く。「心ばへ」は<気持、意向、配慮>や<風情、趣向>を言う語らしいが、此処では「ども」と複数なので、競技者の<集中力>なのだろう。*「数多くなりゆくに」は注に<『集成』は「回数が増えてゆくに つれ」。『完訳』は「鞠が地に落ちて一度と数える」と注す。>とある。「労ある心ばへども見えて」とあるのだから、是は単に<試合数を多く重ねる内に>ではなく、落球せずに蹴鞠の連続回数がどんどん増えて<競技が白熱してくると>という意味なのだろう。蹴鞠は、ざっと鞠を落とさずに蹴り続ける遊び、と説明される。また、先に「善き悪しきけぢめあるを挑みつつ」ともあり、綺麗な鞠筋が評価されて、思わぬ所に飛ぶ鞠は失敗と見做されたであろうことは、およそ球技である以上は一般的な価値基準であり、またその失敗球を上手く修正して落球させないことも評価された筈だ。多分、基本は団体戦で、ゴールのある球技なら狩猟や漁業の囲い込みに通じて、予行演習であり、体力づくりであり、それは即ち軍事訓練であり、危機からの脱出試行であり、そうした試合の意義が共通認識できれば、後は球技自体がどうすれば面白い設定になるか、という多様性も生まれるだろうし、個人技の評価も高まるのだろう。*「上臈(じゃうらふ)」は上級女房の語用が多いが、「臈」は「労」に通じて<年功>を意味し、年功を積んだ高僧、が古い語用らしい。「労ある心ばへ」に掛けた言い回しなのだろうか、高官をこのように言うのはこの物語では珍しい。*「くつろぐ」は<緩む、ゆっくりする、ゆとりがある>などで、此処では<緩んで>ずれる>だ。「緩ぶ(ゆるぶ)」には<緩む>の他に<たるむ、怠る>という語感があるから避けたのだろうか。この一文は、文意の割には言い回しが妙に分かり難い。もしかすると、文意を読み違えているか。

大将の君も、御位のほど思ふこそ、例ならぬ乱りがはしさかなとおぼゆれ(源君も御身分の高さを思えば軽率に過ぎるほどの熱中ぶりかと思われ)、見る目は、人よりけに若くをかしげにて(見た目ではこの場の誰よりも際立って若く目立っていて)、桜の直衣のやや萎えたるに(桜色の上着の柔らかそうな風合いに)、指貫の裾つ方、すこしふくみて、けしきばかり引き上げたまへ

り(袴の裾の方が少し膨らむくらいに、足捌きが良いように気持ち足首の上の方で裾紐を結んでいらっしやいました)。

軽々しうも見えず(低い身分には見えない)、ものきよげなるうちとけ姿に(とても上等ながらも体を動かして着くずれ加減の服に)、花の雪のやうに降りかかれば(桜の花びらが雪のように降りかかると)、うち見上げて(大将はふと見上げて)、しをれたる枝すこし押し折りて(垂れ下がった桜の枝を少し折り取って)、御階の中の*しなのほどにゐたまひぬ(正面階段の中ほどに腰掛けなさりなさいます)。 *「しな」は「品、級」と表記され、事物をある基準によって分類した<種類、階級、序列の順位、立場、人柄>などを意味するようで、此处では<階段の段数>らしい。

督の君続きて(藤君がその隣に座って)、

「*花、乱りがはしく散るめりや(桜吹雪が凄いな)。桜は避きてこそ(風は桜を避けて吹けば良いのに)」 *注に<柏木の詞。「吹く風よ心しあらばこの春の桜は避きて散らさざらなむ」(源氏積所引、出典未詳)。「春風は花のあたりをよきて吹け心づからや移ろうと見む」(古今集春下、八五、藤原好風)を踏まえる。>とある。

などのたまひつつ(などと仰りながら)、宮の御前の方を後目に見れば(宮の御部屋の方の寝殿西側を横目に見れば)、例の(例によって若やいで)、ことにをさまらぬけはひどもして(この蹴鞠の賑わいに、特に落ち着きのない様子で)、色々こぼれ出でたる御簾のつま(若女房たちが覗かせている着物の袖の、色々がこぼれ出ている御簾下や)、透影など(透いて見える人影が)、*春の手向けの幣袋にやとおぼゆ(終わり行く春への餞別かと思えます)。 *「春の手向けの幣袋」とは如何にも歌語的な趣きの言い回しに見えるが、特に下敷きの歌も無いのか、注釈は無い。「手向けの幣袋(たむけのぬさぶくろ)」は、別れに際して去ってゆく人に<餞別として渡す贈り物>のことらしい。桜が散る晩春。夏も近い。去るものは季節でさえ惜しいか。しかし、「終わり行く春」と言い換えてみると、改めてこの言い回しの重たさが気になる。春の大殿、とは正に源氏殿を思わせる。その終わり、とは如何にも不吉な。不用意にこんな言い回しをする作者ではない。というより、意図があつてこそその言い方に違いない。私はこの一文に、その若やいだ華やぎが、かつて夢枕に立った六条御息所以上に、今までで一番ゾツとした。

[第七段 唐猫、御簾を引き開ける]

*御几帳どもしどけなく引きやりつつ(御簾前のいくつかの御几帳を乱雑に引き遣って)、*人気近く世づきてぞ見ゆるに(無遠慮にもその場を下がらず馴れ馴れしく色気づいているかに見えるその女房たちの居る所に)、*唐猫のいと小さくをかしげなるを(猫のとても小さくて可愛いのを)、すこし大きな猫追ひ続き(少し大きな猫が追いかけて)、にはかに御簾のつまより走り出づるに(急に御簾の下から走り出てきたのを)、人びとおびえ騒ぎて(女房たちが驚き騒いで)、そよそよと身じろきさまよふけはひども(ざわざわと御簾前で落ち着かない様子が)、衣の音なひ(衣擦れの音もして)、耳*かしかましき心地す(源君と藤君の二人の耳に賑わしい)。 *「御几帳どもしどけなく引きやりつつ」は注に<御簾に添えて立てられている御几帳をだらしなくずらしている。女三の宮が覗かれる伏線。>とある。「しどけなし」は古語辞典に<非難の意はなく、うちとけた親しみやすい感じを表わす。>と解説されて、その語感では<無造作なさま>くらいの意味だ。その語用として<乱雑だ、だらしが無い、しまりが無い

>という形容にもなる、ということらしい。この場面は、宮付きの若女房たちが貴公子たちの蹴鞠遊びを見物しようと、部屋と縁側の境の御簾際の廂に寄り集まって、御簾前の邪魔な几帳を片隅にく押し退け成した状態>だから、此処の女房たちに日常的なくだらしなさ>があるにしても、この日は他の特別なことに気を取られてそれらが揃え片付けられていなかった、という面も表現されている気がする。いや、だから、それがくだらしない>んだ、と言えばそれまでだが、この文が場面描写か人物描写かと言えば、両方の要素はあるものの、私は場面にも配慮したい。*「ひとけちかし」は「人近(ひとぢか)」と同じで<人なれしている、人見知りしない、人怖じしない>あたりだろうが、むしろこの場の格式を考えれば<無遠慮にも>と取る。「世付く」は<世慣れる、世情に通じる>ともあるが、ざっと<馴れ馴れしく色気づく>と取りたい。というのも、源君と藤君が正面階段の中段に居るということは、女房たちの直ぐ目の前に天下の貴公子二人が居るのであり、それでもその御簾前を離れずに居るという遠慮の無さは、宮廷内にあっては本来はあるまじき無作法なのだろうが、この日の「乱りがはしき」が若者の<色気付き>を愛嬌として無礼講のように大目に見る空気の中で包んでいた、という事なのだろう。似たような雰囲気の場合は、蜚巻二章二段の馬場殿の騎射の場面にも描かれていた。*「からねこ」は<舶来の猫。また、単に猫のことをいう。>と大辞泉にある。愛玩用の猫というものは、唐から持ち込まれたものであるから、らしい。*「かしかまし」は<かしましい>で、「かしましい」は<やかましい。うるさい>とされるが、耳障りで騒々しい、というよりは、女の嬌声で賑わしい、という語感だ。

猫は、まだよく人にもなつかぬにや(猫はまだ良く人に馴れ付いていないのだろうか)、綱いと長く付きたりけるを(首輪の紐がとても長く付けられていたのが)、物にひきかけまつはれにけるを(御簾の裾緒にでも引っ掛けて絡まってしまったのを)、逃げむと*ひこしろふほどに(逃げようとして引っ張って行くに連れて)、御簾の側(みすのそば、御簾の裾が)いとあらはに引き開けられたるを(とても顕わに引き開けられてしまったのを)、とみにひき直す人もなし(直ぐに引き直す者も居ません)。*「ひこしろふ」は<無理に引っ張る。しきりに引き取ろうとする。>と古語辞典にある。「ひこずる」が<引きずる>とあるので、「ひこずる」+「はふ(延ぶ)」の「ひこずらふ(引きずり続ける=引っ張って行く)」の音便かも知れない。

この柱のもとにありつる人びとも(藤君らに近い御階の間の西柱のところにいた女房たちも)、心あわたたしげにて(咄嗟のことに慌てていて)、もの懼ぢしたるけはひどもなり(怯んでいる様子です)。「この」は誰の視点か。語り手の口調を素直に聞けば、話の流れからして、藤君のように思える。そう取る。

[第八段 柏木、女三の宮を垣間見る]

几帳の際すこし入りたるほどに(下長押から少し奥まった所に)、桂姿にて立ちたまへる人あり(女房装束とは異なる、内着姿で立っしやる貴人が居ます)。「きちやうのきは」とは何か。何処か特定の場所を示しているのだろうか。「几帳」は「御几帳」とは別の何かだ。が、是が仮に「御几帳」だとしても、その「際」が何を、または何処を示しているのかは分からない。まして、不意に出て来た「几帳」や「几帳の際」が何かを知る術は私には無い。この余りの唐突さに、本文の方に誤写ないし誤読もあるかと、写本写真をWeb検索して、東京国立博物館(若菜上135/147)と京都大学(v32,p241)の画像サービスを参照してみたが、当該部分の写本を「きちやうのきは」とは私は読めなかった。尤も、私はまともに平仮名写本を読める訓練はしていないので、基本的にはよく分からないのだが、それでも何とか上の「ものおぢしたるけはひどもなり」を探して、下の「すこしいりたるほどに」に挟まれた部分を眺めたが、「のきは」はそれらしくもあるが、どうも「きちやう」は違うように見えた。で

は、何と書いてあるのか、と言え、それが分からない。だから、前後の文との兼ね合いで、此処の「際すこし入りたるほど」という説明が最も説得力が出るような語を推量して、此処の文意を得たい。前の文は「この柱のもとにありつる人びとも」と、正面階段の中ほどに居た藤君たちが、猫が御簾を引き上げて中が見えてしまうことに慌て騒ぐ寝殿を見上げて、御梯の間の西柱近くに見えた女房たちの様子が語られた。そして後の文には「階より西の二の間の東の側なれば」と、この話題の場所が御梯の間の西隣の間の東柱の近くだ、と説明されている。つまり、この文で語られている「桂姿にて立ちたまへる人」は、御梯の間の西柱とその西隣の柱のあいだの、その隣柱近くに居た、ということになる。となると、訳文にもあるように、この「すこし入りたるほど」は<少し奥まった所>という、縁側から見て廂の縦方向に<奥まった場所>を示しているようだ。尤も、「入りたる」自体が<外から見て中に入っている>という見方の語ではあるが、今はこの場面に即して具体的に方向を考えることが大事だ。となると、「きは」は廂と縁側との<境>に違いない。で、それが「の」の格助詞で「境」だと説明され得る対象体は、構造物で見れば<下長押>だ。ということは、初めから分かっていたが、写本を見ても「きちやう」部分が<下長押、しもなげし、なげし>とも読めなかったので、一応こうした理屈を捏ねて、言い換え文の正当性を主張して置く。

階より西の二の間の東の側なれば(はしよりにしのにのまのひんがしのそばなれば、御梯の西柱の隣柱の近くなので)、まぎれどころもなくあらはに見入れらる(猫に引き上げられた御簾の真後ろに当たって、隠れようもなく頭わに見つけられます)。

紅梅にやあらむ(内着は紅梅色の重ね着だろうか)、濃き薄き、すぎすぎに(濃い色から薄い色へ次々に)、あまた重なりたるけぢめ、はなやかに(何枚も重なった色の変化が華やかで)、草子のつまのやうに見えて(冊子の頁並びのように見えて)、桜の織物の細長なるべし(その上着は桜柄の織物の細長のようです)。

御髪のスそまでげざやかに見ゆるは(髪の毛が長く伸びてるのがはっきりと見えたところは)、糸をよりかけたるやうになびきて(撚り糸を並び掛けてあるように揃っていて)、裾のふさやかにそがれたる(髪の毛の端が端切れではなく全体にふさふさと多いままに切り整えられているのが)、いとうつくしげにて(とても可愛らしくて)、七、八寸ばかりぞ余りたまへる(御身の丈よりも2、30cmほど長くいらっしゃいます)。

御衣の裾がちに(着物を長く引きずって)、いと細くささやかに(細身で小柄で)、姿つき、髪のかかりたまへる側目(その立ち姿に髪が掛かっていらっしゃる横顔が)、言ひ知らずあてにらうたげなり(藤君には言いようもなく高貴で美しく見えたのです)。夕影なれば、さやかならず(夕方のほの暗さに見た姿なので良く見えず)、奥暗き心地するも(見たいものを見え掛けで隠された気分)、いと飽かず口惜し(とても物足りなく心残りです)。

鞠に身を投ぐる若君達の(蹴鞠に身を投じる若君たちの)、花の散るを惜しみもあへぬけしきどもを見ると(花の散るのを惜しみ見ようとしめない様子を見ようとして)、人びと、あらはを(女房たちは自分の身が頭わに曝されているのを)ふともえ見つけぬなるべし(直ぐには気付かないようです)。

猫のいたく鳴けば(猫が紐に絡まってひどく鳴くので)、見返りたまへる面もち、もてなしなど(縁側の方を見向きなされたその貴女の表情や物腰などが)、いとおいらかにて(とてもおっとり

していて)、若くうつくしの人やと、ふと見えたり(若くて可愛い人だと、藤原の君は一目で思ったのです)。

[第九段 夕霧、事態を憂慮す]

大将、いとかたはらいたけれど(源君は、御簾が上がって御姿が見えていらっしゃる姫宮御方の不始末が、身内の立場としてはとても見っともなかったが)、はひ寄らむもなかなかいと軽々しければ(自身が這い寄って御簾を直して始末するのも大将の身分としては却ってあまりに軽々しいので)、ただ心を得させて、うちしはぶきたまへるにぞ(ただ姫宮に御身の露出を気付かせようと、咳払いなさったので)、やをらひき入りたまふ(姫宮は直ぐに奥へ引き込みなさいます)。

さるは(しかしそのように宮が隠れてしまいなさるのは)、わが心地にも(源君自身にも)、いと飽かぬ心地したまへど(とても惜しい気がしなさったが)、猫の綱ゆるしつれば(女房が猫の紐を解き緩めて、御簾が下がり直ったので)、*心にもあらずうち嘆かる(期待外れ交じりの安堵の溜息を符とお吐きになります)。*「心にもあらず」は<不本意ながら>と<無意識に>の複意の洒落語用。さすがに、この大将みたいな立場になる人は少ないだろうが、立場上は管理責任があるものの、個人的にはその不都合な事態の推移に興味を覚える、みたいなことは、実際に良くある気がする。

まして、さばかり心をしめたる衛門督は(まして、そのように貴女に見入って興味を掻き立てられた藤君は)、胸ふとふたがりて(恋心で胸が一杯になって)、誰ればかりにかはあらむ(他の誰でもあろう筈のない)、ここらの中にしるき桂姿よりも(大勢の中ではっきりとそれと分かった姫宮の桂姿からしても)、人に紛るべくもあらざりつる御けはひなど(他人と間違えようもないその高貴な立ち姿などが)、心にかかりておぼゆ(強く印象付いて忘れられません)。

さらぬ顔にもてなしたれど(素知らぬ顔はしていたが)、「まさに目とどめじや(藤君も姫宮を、必ず目に留めただろう)」と、大将はいとほしく思さる(と、源君は気懸かりにお思いになります)。わりなき心地の慰めに、猫を招き寄せてかき抱きたれば(その藤君を横目で見れば、やるせない気持の慰めに、猫を誘き寄せて胸に抱いては)、いと香ばしくて、らうたげにうち鳴くも(とても良い香りで可愛げに鳴くのも)、なつかしく思ひよそへらるるぞ(姫宮が懐かしく偲ばれるという)、好き好きしきや(いやらしさだこと)。